

メイド・イン・ジャパンのものづくり

国際ファッション専門職大学 金谷美和

国際ファッション専門職大学 丹羽朋子

本特集は、2022年3月13日にオンラインにて開催されたシンポジウム「Made in Japanのものづくり」の報告である。このシンポジウムは、本学基幹共同研究「コンタクト・ゾーンとしての現代ファッション」（代表：田中雅一、2019～2021年度）の成果公開として、南山大学人類学研究所との共催で行われた。ファシリテーターは本学の金谷美和と丹羽朋子である（本特集の編集も担当）。一般参加が43人、学内からも13人の教員の参加が得られた。シンポジウムの構成は以下のとおりである。

宮脇千絵氏（南山大学・准教授）

「趣旨説明 メイド・イン・ジャパンのものづくりを考える」

白水高広氏（株式会社うなぎの寝床・代表取締役）

「地域文化商社として服・店・情報・ツーリズムを総合力で伝達」

高馬京子氏（明治大学・准教授）

「フランスにおける「メイド・イン・ジャパン・ファッション」の表象の変遷」

コメント 蘆田裕史氏（京都精華大学・准教授）

コメント 池上慶行氏（land down under・代表）

ディスカッション

終わりの挨拶 田中雅一（本学・教授）

シンポジウムでは、「メイド・イン・ジャパン」をキーワードにアカデミアと実務家とが一堂に集まり、アパレルの現場の実態と、グローバルなファッション産業における日本のアパレル産業の位置付けについて議論を行った。まず、宮脇千絵氏が趣旨説明として、岡山県倉敷市児島のジーンズの越境的な性格に言及し、メイド・イン・ジャパンとはいったい何だろうか、という本シンポジウムの問いが述べられた。つぎに白水高広氏が福岡県八女市において行っている地域文化商社というコンセプトのビジネスについて、ビジネスのうまれた経緯、理念、実践などを詳細に語り、地域ビジネスにおけるメイド・イン・ジャパンの意味について論じた。続いて、高馬京子氏がフランスの事例から、海外の視点におけるメイド・イン・ジャパンの意味をひもとき、日本が西洋のブランドの生産の一端を担っている方法をアプロプリエーションとコラボレーションという概念で論じた。さらに、ファッション研究の観点から蘆田裕史氏が、児島でアパレル産業を起こした起業家の観点から池上慶行氏がそれぞれコメントし、その後、発表者とともに議論を展開した。